

2003年6月

発行 大阪大学山岳会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学工学部建築工学専攻 大野研究室内

TEL 06-6879-7635

FAX 06-6879-7637

OUMC

HATT-Jに参加して

副会長 野田 憲一郎

大学山岳部の低調ぶりが語られて久しいが、対照的に、日本の山は中高年登山者でいっぱいである。日本の登山人口は550万とも、もつと多いとも言われ、最近はこの山も元気なおじさんやおばさんに占領されて



10年ほど前までは、登山者の多い山はゴミも多かった。残飯や包装紙が登山道のそこそこに散乱していた。ゴミは山の美しさを損ねるばかりでなく、残飯が低地のネズミを山に呼び寄せるなど、山の生態系にも悪影響をもたらしていた。

1991年、エベレスト初登頂者であるエドモンド・ヒラリー卿の呼びかけに応じて、山の環境保護団体として日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HATT-J、代表田部井淳子氏)が設立された。当時、世界の数カ国でHATTが設立されたのだが、目的はヒマラヤの自然破壊を食い止めるとともに、自国の山にも、もつと自然保護の目を向けることだった。HATT-Jは、国内では、

誰にも最もわかりやすい山の環境保護活動として「環境登山」の名前で山のゴミを拾い集める運動からスタートした。

全国で毎月、環境登山、環境ハイ

キングを実施、両手にポリ袋と炭はさみを持って山を歩き、ゴミを拾い集めた。しばらくは奇異の目で見られたり、「これも持つて行って」などとやられたりもした。のちには「ご苦労さん」と声をかけられるようになり、毎度、空き缶や包み紙などを大量に持ち帰った。今ではゴミの持ち帰りは常識となり、われわれのお土産も目に見えて減少した。

難しい「過剰利用」対策

しかし、大勢の元気なおじさん、おばさん登山者は別の深刻な問題を提起している。彼らはブランド志向が強く、「日本百名山」や都市近郊の有名な山に集中する傾向が強い。このブームに乗って旅行会社がツアー

を主催し、バスで数十人が一団となって山に入るなど、過剰利用(オーバーユース)による環境破壊をもたらしている。こうなると、いくら1人当たりのインパクトを減らしても、その山の浄化能力を超えて登山者が入れれば環境は壊れる。登山道の拡幅、トイレによる水質の悪化など、さまざまな問題が起きている。

この問題の解決には登山者がいるいるな山に分散することが必要だが、それを促す方法はまだ議論が始まったばかりだ。HATT-Jでは、これが次の10年のメインテーマと受け止め、対策を考えている。

この4月、HATT-Jや日本山岳会など国内の主要7登山団体の環境保護委員会が共同で「国際山岳自然環境集会2003」を開催した。スイス、韓国、台湾の登山団体と話し合ったが、いずれの国も、オーバーユース問題を抱えていること、対策は日本が最も遅れていることなどがわかった。早く何とかしなければと思うが、問題の幅広さと複雑さ、関係者の利害など前途は多難だ。

まずはOUMCの皆さん、出来るだけ人の少ない山に行くことを心がけましょう。

(HATT-J理事、1960年経済学部卒)

半世紀前のスライドも 対岳館で白馬集会

本会の夏の恒例行事である白馬集
会は2002年8月31日から9月1
日にかけて長野県白馬村八方の「ホ
テル対岳館」で開かれた。出席者は
家族を含めて17人で、好天の下、懇
親を深め合った。

1日目は、夕食のあと、別棟の
「与兵衛俱樂部」で懇親会。幹事役の
田島汎氏（経28）が持参した、50年
も前の山行のカラーライドの映写
などがあり、遅くまで懇談が続いた。
2日目は、唐松岳往復、遠見尾根、

八方尾根散策など思い思いのパーテ
ィーに分かれて、夏の終わりを楽し
んだ。

集会参加者は次のみなさん。

田島汎（経28）、住吉仙也（医29）、
山本光二（法29）、二木節夫（工29）、
近璋三（工29）、川島勇（工29）、木村
裕一（経31）、坪井和子（薬33）、野
田憲一郎（経35）、山本信樹（工35）、
米林外茂男（工35）、兼清喜雄（工35）、
前沢祐一（工37）、佐藤毅（工37）、
横尾秀次郎（工39）、高田邦雄（経39）

東京支部だより

東京支部恒例の山行は、幹事役の
石原敏雄氏が社務で中国・上海に長
期出張となったことで、2002年
秋から中断していたが、今年4月の
鳳凰三山行で久しぶりに再開した。
以下、2002年春以降2件の山行
を報告する。

（前沢 祐一）

**2002年5月／中房温泉から
燕岳往復** 前年暮れに挑戦し、吹雪
のため撤退した際に誓ったリベンジ
を実行。メンバーは野田・米澤・前
沢・石原の4人。

5月2日（快晴） 中房温泉に集
合。色々な温泉に片端から入る。



鳳凰三山・薬師岳で

3日（快晴） 中房温泉6・20出
発、11・00燕山荘着。燕岳往復後、
燕山荘泊。好天に恵まれ、北は白
馬・劔から南の槍・穂高まで素晴ら
しい展望を楽しむ。久方ぶりに北鎌
尾根を正面から眺めて感慨に浸る。

4日（雨） 大天井岳往復の予定
だったが、朝からの雨と霧で展望ゼ
ロ。あきらめて下山。中房温泉に入
った後、穂高町のそば屋でゆっくり
してから帰京。

**2003年4月／夜叉神峠から
鳳凰三山往復** 石原氏の不在で山行
への足が遠のいていたところへ「雪
のある時期に」と野田さんから声が
かかった。メンバーは野田、米澤、

前沢、横尾、井上の5人。

4月28日（快晴） 7・30八王子
集合。車2台に分乗して10・00夜叉
神峠登山口着。11・00夜叉神峠に着
き、北岳・間ノ岳・農鳥岳の大展望
を楽しむ。富士山は逆光でイマイチ。
杖立峠・苺平経由で、15・20南御室
小屋着。小屋前の雪の広場で、持参
のワイン、水割りが最高。南御室小
屋泊。

29日（快晴） 6・30出発。薬師
岳から、南は赤石岳、正面に白峰三
山、右正面に仙丈岳・甲斐駒ヶ岳の
展望を堪能する。観音岳を経て、地
蔵岳オベリスク基部まで北上し、引
き返して薬師岳小屋泊。雪に埋まっ
た小屋は冷蔵庫のように寒いうえ、
食事のまずさに辟易した。「圧力釜
ぐらい使え」「レトルト食品の方が
まし」と、食い物の恨みは果てしな
かった。

30日（風雨） 前夜からの風雨が
屋根をたたく音に、4時起きで下山
開始。小屋を出てすぐの吹きさらし
で、飛ばされそうな強風にたじろぐ。
砂つぶてが顔に痛い。久し振りの感
覚である。しかし、すぐに樹林帯に
入り、雨の中を南御室小屋まで急ぎ、
炊事場の屋根の下で、ゆっくり朝食。
10・00夜叉神峠登山口に戻り、少し
下の芦安村営温泉にゆっくり入る。
12時頃、現地解散。

大阪大学山岳部 活動報告

2002年度

リーダー所感

河野 美樹

2002年度は前年までの事故の経験を踏まえ、山に対して謙虚に、そのうえで前向きに取り組むことを心がけた1年であった。

春合宿はパーティーの力量を考え、いつでもエスケープ可能な八ヶ岳を選んだ。横岳の雪と岩のミックス、根石岳の強風を体感することが目的であったが、赤



岳からの下降路のミスによって、思わぬバリエーションを体験することとなった。

日数こそ短かったものの、悪場の下降や吹雪の中の行動を強いられて、各人が大きな経験を得ることができた山行であった。

新歓合宿は新人1名を交えて剣岳

周辺で行った。OBの方の協力もあり、剣本峰へ行くことができたのはよい経験となった。

夏合宿は天候に恵まれ、雨を感じたのは、わずかにビバークの日の小雨程度と、行動に支障が出なかったため、奇跡的にも全日程行動可能となった。2年渡辺、1年藤井が滝谷ドーム北壁とともにドーム中央稜にトライできたこと、また渡辺は北壁でアルパイン初リードを達成できたことが大変有意義であった。

冬山春山偵察合宿は10年ぶりの大雪に見舞われ、偵察が思うようにならなかったが、腰まで埋まるラッセルを皆が初体験し、雪を泳ぐような感覚を楽しむことができた。

御岳合宿は昨年よりは格段に雪があったものの、ホワイトアウトで十分な訓練はできなかった。しかしながら、簡易雪洞を掘ってビバーク訓練を行うなど、新しい経験を積むことができた。

冬山合宿は偵察の失敗に伴って四国・石鎚山を選んだ。ささやかなラッセルを楽しむつもりが、トレースがすっかりついていたので、楽々、山頂に立ててしまった。経験値として得るものが少なかったのは残念であったが、素晴らしい景色を楽しめたのはよかった。

各山行それぞれに意義があったと

思うが、やはり積雪期の山行の内容不足は否めない。それはリーダー層の経験不足と人手不足にあるように思う。今後、山岳部に多くの新人が入って力強い母体がつくられていくことを願ってやまない。1年間、ご指導・ご鞭撻いただきましたOBの皆様はこの場をお借りして感謝いたします。ありがとうございました。

.....

◆春山合宿／八ヶ岳

「期間」3月17日～19日
「メンバー」河野（L・2年）、原（SL・1年）、渡辺（1年）、磯部（OB）

3月17日（曇）入山・雪上訓練
美濃戸口（7・50）～赤岳鉱泉（11・06）～大同心方面～赤岳鉱泉（15・50）

テント設営後、大同心方面で雪上

訓練。フィックス通過、弱層テストを行う。

18日（曇のち雪）赤岳鉱泉（5・55）～赤岳（11・05）～文三郎道分岐（17・05）～赤岳鉱泉（18・15）

核心と思われた硫黄岳・赤岳間の岩と雪のミックスは問題なく通過。時間に余裕があったことから、赤岳山頂より訓練を兼ねてフィックスを張る。1ピッチ目は稜線上。低気圧

の影響か、途中で風が強くなり、時折、飛ばされそうになる。通過を待っている間に凍える。2ピッチ目は斜面を下降したあと、最後に岩をクライムダウン。足場が不安定でばらばらと崩れ落ちていくので、みんな恐る恐るの下降であった。この時点で下降路を間違えていることに気づくが、下方に夏道と思われる個所が見えたため、下降を続ける。3ピッチ

春山合宿・赤岳からの下り

チ目は岩場の下降。足場がちょうどよい具合にあり、問題は無い。4ピッチ目は雪壁のフロントポイントイングでの下降。アイゼンの爪がよく刺さり、快適。5ピッチ目は雪の斜面を下降し



その後、ルンゼをクライムダウンし、やっとの思いで夏道に復帰した。

最後のピッチの途中から雪が舞い始め、視界がなくなる。夏道に復帰はしたものの、なだらかな斜面で道は不明瞭。雪色の違いや足裏の感触で薄っすらとわかる道をたどった。吹き付ける雪がまつげに積もり、目が開かない。気づくと、ほおが凍って凍傷になりそうであった。樹林帯にたどり着いた時には、ほっと胸をなでおろす。辺りが闇につつまれる少し前に帰幕。

19日(曇) 雪上訓練・下山

雪上訓練(7・30)〜8・30) 赤岳鉱泉(10・25) 美濃戸口(12・55)

根石岳方面への縦走を予定していたが、前日の疲れを考慮して、テント場付近で弱層テストを行った後、下山。地面まで掘りぬき、1年分の雪の層を確認した。

◆新歓合宿／雷鳥平定着

〔期間〕5月2日〜6日

〔メンバー〕高沢(4年)、河野(L・3年)、渡辺(SL・2年)、原(2年)、乾(2年)、藤井(1年)、磯部(OB)、寺田(OB)、藤田(OB)

5月2日(快晴) 入山・雪上訓練
室堂(9・30) 雷鳥平(10・

30) 雪上訓練(11・50)〜15・40)

富山駅で原が登山靴を忘れたことに気づき、大阪へ戻る。残りの部員で原の共同装備を荷分けし、1人当たり重量は約30kgとなった。天気は快晴で入山日和。1年の藤井は、初めての雪山で、歩きにくそうにしていた。テント設営後、真砂岳西斜面で雪上訓練。歩行訓練、滑落停止、フィックス通過などを行う。夕刻、原合流。

3日(晴のち曇) 雪上訓練

雷鳥平(6・55) 別山乗越(8・30) 雪上訓練(9・00)〜13・30) 雷鳥平(15・00)

別山乗越の北側斜面で雪上訓練。



新歓合宿 奥大日岳で

歩行訓練、滑落停止、ピッケルストップ、フィックス通過など。

4日(雨) 沈殿

5日(雨のち曇り時々晴れ) 雄山・剣本峰アタック

朝から雨模様だったが、午前5時、寺田、藤田、渡辺、原、藤井が雄山に向けて出発。6時半ごろ、天気回復の兆しが見え始めたので、本峰隊も出発を決意。ガスで視界がきかない中、剣御前小屋へ。

剣沢で大倉、蔭山両OBにお会いした後、時々吹き付ける強風の中を前剣へ向かう。前剣の登降はステックがしっかり刻まれていた。カニのタテバイ経由で本峰山頂に立ち、ヨコバイ経由で下山。前剣の下りでフィックスを張る。途中で団体に割り込まれてフィックスを使用できなくなり、順番待ちで思いのほか時間がかかる。当初は1ピッチで終える予定だったが、急いで下降しようとした乾が滑ってフィックスが活躍してしまつたため、安全を考えて、もう2ピッチ、フィックスを伸ばす。雷鳥平までの道は長かった。藤田OBと原、下山。

本峰隊 雷鳥平(7・30) 別山乗越(9・00) 前剣(11・00) 本峰(13・15) 一服剣(16・40) 雷鳥平(19・00)
6日(快晴) 奥大日岳アタック

雷鳥平(6・00) 奥大日岳(8・00) 雷鳥平(10・00) 室堂(13・00)

全員で奥大日岳アタック。天気は快晴で、視界は360度。最終日を飾るのにふさわしい、おだやかで気持ちのよい遠足であった。帰幕後、下山。

◆夏山定着合宿／涸沢

〔期間〕7月27日〜8月5日

〔メンバー〕河野(L・3年)、渡辺(SL・2年)、藤井(1年)、栗本(1年)、塚部(1年)、高沢(4年)、磯部(OB)、寺田(OB)

7月27日(晴) 入山

上高地(7・40) 横尾(11・40) 11・55) 涸沢(18・00) 現役部員入山。当初は2日かける予定だったが、疲れ気味の藤井を除いてメンバーの体調が比較的良好なことから、横尾で藤井の荷物を荷分けした後、涸沢まで入る。

28日(晴) 雪上訓練

涸沢(8・10) 雪上訓練(9・00) 11・00) 帰幕(11・45) 吊尾根方面の雪渓で雪上訓練。帰幕後は涸沢ボルダーで楽しむなど、思い思いに過ごす。

29日(晴) 北穂東稜

涸沢(5・10) 東稜のコル(8・09) 大コル(10・10) 北穂

山荘(11・10) 帰幕(14・30)

雪上訓練の予定であったが、積雪量が少なかつたため、予定を変更して北穂東稜へ行く。コルへ突き上げるガレ場で、本来なら右岸を歩くべきところを左岸を歩き、浮石だらけでひやひやした。藤井が大きな浮石を踏み、ガラガラと1、2層の岩雪崩を起こしながら滑り落ちてきた時には命がないかとも思った。米粒ほどのホールドを探して、その場をのりきり、やっと稜線に出られたときには喜びもひとしお。ゴジラの背をゆくが、恐怖感には先のガレ場に遠く及ばなかつた。

30日(晴) 滝谷・奥穂

高沢・河野・渡辺は滝谷ドーム中央稜へ。ドーム中央稜は取り付きにたどり着くまでにやや迷う。ルートはフリーの要素が強く、岩も硬くて快適であった。藤井・栗本・塚部は奥穂高岳へ遠足に行く。

奥穂遠足 〓 涸沢(5・10) 〓 奥穂(7・50) 〓 涸沢(12・26)

31日(晴) 滝谷・前穂北尾根

高沢・藤井・塚部は滝谷ドーム北壁。1ピッチ目で藤井が足を滑らせ、危うくグラウンドしかける。残置の支点は不安定なものが数多く見受けられた。河野・栗本は前穂北尾根下半へ。登山者が少ないらしく、踏み跡が不明瞭。岩稜に、お花畑に、ヤ

ブ漕ぎと盛りだくさんに楽しむことができた。

北尾根下半 〓 涸沢(7・10) 〓 5・6のコル(8・17) 〓 8峰頂上(10・30) 〓 帰幕(13・55)

8月1日(曇時々雨) ビバーク訓練

ビバーク訓練のため高沢・藤井・塚部は明神岳へ、河野・渡辺・栗本は横尾谷へ向かう。ともにバリエーションルート。横尾谷組はパノラマ新道経由で横尾に行き、磯部OBと合流。野生のサルがキーキーと泣きわめく中、雪渓とガレ場をつめ、天狗の踊り場へ。大キレットを望むステキな場所であった。

横尾谷組 〓 涸沢(6・30) 〓 横尾(10・15) 〓 天狗の踊り場(16・10)

2日(曇) 帰幕

ビバークから帰幕。A沢のコルまでのガレ場は不安定で緊張感にあふ

れた。曇り空の中の飛騨泣きは情緒たつぷりであった。寺田OB入山。

横尾谷組 〓 天狗の踊り場(5・55) 〓 A沢のコル(7・25) 〓 北穂高小屋(9・00) 〓 涸沢(12・00)

3日(晴れのち曇)

磯部OBと河野は屏風岩東稜へ。梓川の徒渉は足が凍りそうな冷たさであった。1ピッチ目はジャンピングの輪が取れたところに切れかけの細いスリングがかかった支点が連続。ロシアンルーレット的なアブミでの登攀となり、支点を作りながら登る技術も必要であると感じた。

寺田・渡辺・栗本は滝谷ドーム北壁へ。渡辺はアルパイン本番初り。栗本はアブミ連続のルートはあまり好きではなかつたようだ。

屏風岩東稜組 〓 T4取付(7・05) 〓 T4(9・30) 〓 登攀終了(15・30) 〓 屏風の頭(17・50) 〓 帰幕(19・00)

4日(曇)

前穂北尾根など 磯部・高沢は前穂4峰正面、寺田・藤井・塚部は滝谷ドーム中央稜、河野・渡辺・栗本は北尾根上半へ行く。北尾根上半

3峰の核心が終わってから時々踏み跡を外れてしまい、不安定なところで1ピッチだけザイルを出す。2峰の下降は懸垂下降(渡辺はクライムダウン)。

北尾根上半組 〓 涸沢(4・10) 〓 前穂高岳(10・49) 〓 奥穂高岳(13・00) 〓 涸沢(15・00)

5日(曇) 下山

涸沢(7・00) 〓 本谷橋(8・00) 〓 横尾(8・50) 〓 上高地(12・00)

◆冬山春山偵察合宿／西穂高岳・鹿島槍ヶ岳

「期間」11月1日 〓 4日

「メンバー」河野(3年・L)、渡辺(2年・SL)、乾(2年)、藤井(1年)

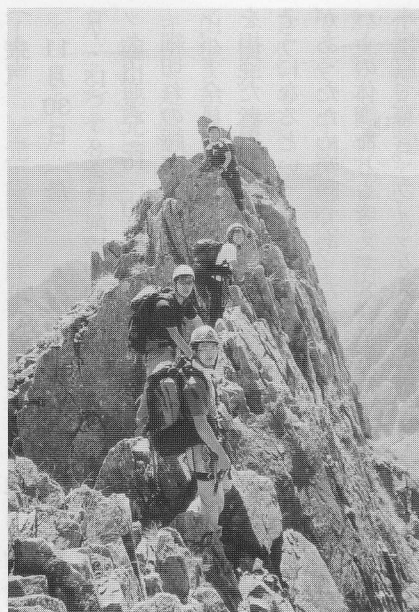
11月1日(雪) 西穂高口(11・30) 〓 西穂山荘(13・35)

西高東低の気圧配置で、当然、雪は降るだろうという予測どおり、ロプウェイが高度を上げるにつれ、窓の外の景色は秋から冬へと変わっていった。ちらつく雪の中、膝下のラッセル。西穂山荘脇で幕営。

2日(曇ときどき雪) 西穂山荘

(6・12) 〓 西穂独標(9・00) 〓 西穂山荘(10・15) 〓 12・00) 〓 帝国ホテル前バス停(15・10)

西穂高岳をめざす。粉雪の舞う中、ラッセルを交代しながら、コースタ



夏山合宿・北穂東稜

イムの3倍の時間をかけて独標前にたどり着く。時間的余裕がなかったのに加え、手袋の中で手が凍りつき、下見をしていない岩にはとても取り付く気になれなかったことから敗退を決める。下山後、鹿島槍にトライすべく信濃大町駅でビバーク。

3日(曇のち雪) 扇沢(7・00) 〓 ジャンクシヨンピーク(15・00)

扇沢へ行くと、案の定、しつかりとした雪山であった。途中で男子大学生4人組のパーティーが合流し、抜きつ抜かれつ歩を進める。本格的なラッセルで、時には肩越しの雪をかき集めることさえあった。ジャンクシヨンピークで幕営する。

4日(曇) ジャンクシヨンピーク(5・30) 〓 扇沢(13・30)

朝、目覚めると、前日つけたはずのトレースがまったくわからなくなっていた。歩き始めると、さつそくずぼずぼと雪に埋まって、わずかにメートル進むのに全身の力を使わなくてはならなかった。偵察の目的は果たすことができなかったが、ラッセルの楽しさを味わうことができた山行であった。

◆御岳雪上訓練

〔期間〕11月30日 〓 12月1日

〔メンバー〕河野(3年・L)、渡辺(2年・SL)、乾(2年)、藤井

(1年)

11月30日(曇) 八海山小屋

(7・15) 〓 8合目(12・30) 〓 フィックス通過(16・30)

細切れの睡眠、その他諸事情でメンバー全員が睡眠不足。先頭の役割を担った者以外は、歩きながら眠りそうになるといった有様。トレースがあつたため楽勝であつたが、メンバーの体調なども考えて8合目避難小屋脇で幕営。フィックス通過の訓練をする。

31日(曇) 8合目(7・15) 〓

雪上訓練(10・40 〓 14・50) 〓 二ノ池

フル装備のまま剣ヶ峰を経て、二



新勸合宿 前剣の登りで

ノ池を目指した。山頂通過後よりガスが濃くなる。地図で確認しながら、適当な斜面を探し、雪上訓練。歩行訓練、ピッケルストップ、滑落停止

などを行う。その後、雪洞を掘るための斜面を探すが、ガスが濃く、視界が10メートルもなかったため、適当な雪のある斜面が見つからず、たて穴式の雪洞を掘る。夜は2パーティーに分けて交代でビバーク訓練。

12月1日 二ノ池(6・45) 〓

御岳高原(10・30)

下山。歩き始めはガスが強かったが、次第に晴れる。ガスの切れ間から見えた、太陽と雲海と山々はすばらしかった。

◆冬山合宿/石鎚山

〔期間〕12月21日 〓 22日

〔メンバー〕河野(3年・L)、

渡辺(2年・SL)、竹内(2年)、

藤井(1年)

12月21日(雨) ロープウェイ成

就駅発(9・16) 〓 山頂避難小屋

(12・30)

雪を期待していたが、あいにくの雨。積雪量もたいしたことなかったため、少々もの足りなかった。山頂避難小屋付近にテントを張る。設営のときにぬれたヤッケやザックがバリバリに凍り、四国の山といつても侮れない、と思つた。

22日(晴のち曇)

避難小屋(7・06) 〓 弥山(7・

20) 〓 国民宿舎(10・56) 〓 西の川(2・00)

朝、目覚めると天気はよく、まだ明けきらぬ空に浮かぶ月が美しかった。少しずつ色づく空を眺めながら弥山山頂に着く。ちょうど昇つてきた太陽を背景に天狗岳がそびえ立つ様子はとても素晴らしくカメラのシャッターを何度も切つた。プロッケー現象も見る。鎖場を下つて天狗岳へ。北壁の縁を歩こうと斜面をのぼりきると、いきなり目の前に絶壁が現れて、みな、わつと声を上げた。

技術的な面では問題なく、経験値としては得るものが少なかったが、このレベルであれば十分にできると、各人が自信を得ることができた山行ではなかったかと思つ。

(河野 記)

■大阪大学山岳部ホームページのアドレス変更

ホームページのアドレスを変更しました。新しいアドレスは <http://osaka-yama.hp.infoseek.co.jp/> となっております。

ホームページについてのご要望、ご意見などがあれば担当の河野美樹(konomiki@yahoo.co.jp)まで気軽に お寄せください。

会員の近況

夏の白馬集会和新年会の出欠はがきから抜粋しました。その後の變動などは未確認。卒業年次順

加藤 幹太(理27) 一昨年、滋賀大学を退職して無職の自由を味わっています。低い山を歩いたり、健康に留意しています。

大島 輝夫(理27) 年に1回くらい旧制高校山岳部OBと共に2、3時間で登れる山に行ったりしていますが、90歳になられた方も参加されています。現役の活動報告も関心を持っています。合宿の日数が短いのは気になりますが、女性部員が岩登りやフリークライミングで活躍しているのは何よりです。

川島 勇(工29) 肝臓ガン手術から5年過ぎ、「5年後生存率50%」の中に入っていますが、C型肝炎ウイルスの量が多く、週3回の通院治療は続いています。「一病息災」で、今のところ体調は良く、ウォーキング、囲碁、読書など、ごく普通に楽しんでいきます。

二木 節夫(工29) 近年、肩と腰と足の痛みに困っていましたが、よくなる方向に向かっています。低山登りのグループと月1回出かけてい

ます。登り2時間半以上の山は計画しません。日本山岳会の『山岳』で、中村保さんの「念青唐古拉山脈」探查報告を読んで、精神的に昂揚されました。老人パワーのすごさに吃驚しました。住吉さんもすごいが、後輩にもえらい奴がいるものです。

三枝 礼子(業30) 物忘れ、度忘れが多くなり、始終ろろろろしています。これは多分、せめて足腰の老化抑制をとという天の配剤でしょう。そのうち、ほぼ50年ぶりに六甲山に行ってみようかなどと思案中です。

高木 俊夫(理31) 閑職の度が深まり、無職に近づきつつあります。昨年6月には残る余力で秋田駒ヶ岳八幡平、岩木山、八甲田山、白神山などを彷徨してきました。

鷺沢 忍(工31) 毎年夏から秋にスイス山麓散歩に出掛けておりますが、体力の衰えて山からの距離がだんだん離れていることが、撮った写真からも判ります。(山から距離ができて、中間の空気によってぼけてきている)

横井 保枝(文31) 昨年はあまり山歩きができませんでした。冬にスキーで足腰を鍛えたいと思います。

西川 元夫(工32) 数え年70の正月。そろそろ永の旅支度を始める年を迎えました。

宍戸 元(医32) 昨年9月、大

動脈弓部人工血管置換手術を受けました。11時間に及ぶ手術でした。今は少し体力もつき、まず元気といえる状態です。

四方 大中(法33) ようやく社長業を卒業しました。もっぱら趣味(ゴルフ、囲碁、小唄等)に磨きをかけようと励んでいます。

坪井 和子(業33) 最近、脚力の低下に驚いています。長らく、主人のパンクした心臓にお付き合いをしていたせい、車で信州を走り回って、若い頃に登った山々のスケッチをするのが関の山でした。これからはまた少しずつトレッキングなどを楽しみたいと思っています。

山本 信樹(工35) 一昨年10月、岩手山を下山中、登山口まであと500mという所で転倒、右首首を骨折し、快復に半年専念しました。昨年7月、南アルプスの光、聖、赤石を縦走してきましたが、久々の山行で登攀力の低下を痛感しました。

米林 外茂男(工35) 会社(旭化成)を退職して約1年になります。悠々自適とは参りませんが、カツカツ自適といったところでしようか。腰痛気味で、軽い登山に時折行く程度です。現役の山岳部員が減っているとのこと、自分の現役の頃と比べて時代の移り変わりを感じます。

平田 彰(経35) 腰痛で10分以

上歩けなくなりました。多分、若い頃に傷めたのが、今になって出てきたのだと思います。

玉井 康雄(理36) 近年、体調すぐれず、山へは出かけておりません。それでも昨年7月には上高地へ行きました。カミさんと車いすを押して徳沢まで行き、帰りは私は所々でそれに乗り、カミさんにブレーキになつてもらって無事下山しました。

村井 忠雄(工36) 会社行事と重なり、(集会に)参加できず、残念です。来年からは大丈夫と思えますが、身体を鍛える必要があります。まずは減量から始めます。

田村 俊秀(医38) 昨年8月上旬、神戸大学で、国際保健医療学会がありました。参加者のほとんどは東南アジア、アフリカ、南米、それにイランやアフガニスタンまで、援助活動をしている方々でしたが、山岳部、探検部出身者が少なからず見受けられました。OUMCの皆さんも将来、海外に雄飛されてはいかが。

梶本 孝治(工38) 還暦を2年オバーの身ですが、仕事の方も元気にやっています。事務所は神戸・三宮で、通勤はバス15分と、長年のサラリーマン生活の中、天国のような生活です。天気が良いれば相変わらず、我が家の庭のような六甲山を歩いています。このごろは山という山、

老人が多いのに閉口ですが…。年に一、二度、中学時代に初めて立山・剣に連れて行ってもらった恩師と、アルプス（もちろん日本の）へ行くのが楽しみな昨今です。

宇野 雅明（医39）町の耳鼻科医をしています。日曜日にはハイキングかテニスを楽しみ、登山もたまにしています。

木原 秀幸（工39）会報の百名山挑戦記、楽しく読ませてもらいました。私の登山数（昨年8月現在）は北海道4、東北、関東各5、中部22、関西・中国5、四国・九州6の計47山。時間があれば他の山も登ってみたいと思います。

吉川 信也（理40）幸い、健康に恵まれて、毎日忙しく働いています。山は眺めるだけになりました。

大野 義照（工42）昨年登った山。5月11御岳（標高差10000mをシリセード）、百里ヶ岳、金糞岳。11月11弥山・八経ヶ岳・行者還岳（弥山は新人山行以来39年ぶり）、兵庫・七種山。ほかに多紀アルプス（6月）、蓬萊山（7月）と、時間をみつけて日帰りで登っています。

黒田 治朗（医44）あと2年で還暦ですが、部下のいない一人医長はつらいものです。まあ仕事があるのは素晴らしいことだと頑張っています。引退したら、近郊の山登りをし

たいと思っています。

中岡 和哉（医46）インターネットで三沢隊の報告や吉住先生のお元氣な写真を見ておられます。現役メンバーは一部、中之島山岳会と重複しており、医学部の学生が多いのは何となくうれしい気分です。

井上 太一（理48）百名山のあとは好きな山を自由に登る予定だったのが、とんと登らなくなりました。

上松 一雄（工50）父母を相次いで亡くし、人生の大きな節目を迎えました。すでにいい年になりましたが、一層気持ちを引き締めて、これからの人生を送りたいと思っています。山岳部の名簿を見ますと、女性もおられ、良い意味で時代の変化を感じます。

大宅 幸夫（菌51）先日（昨年12月）、友人らと3人で御岳山へ山スキーに出かけました。前日の雪でラッセルが大変で、予定の半分ほどの行程で帰ってきました。また最近、甲田さんが以前言っておられた四国遍路を女房と一緒に始めました。（と言っても、まだ2回ですが）。そうそう、夏は韓国の雪岳山（ソクラサン）へ行ってきました。

佐野威和雄（理53）富山と名古屋と東京を行ったり来たりしています。今年、もう少し自分の時間がとれればと思っています。

後藤 正教（法54）忙しい部署に配属されて、最近、山にも全く登っていません。家の隣の畑で、有機・無農薬・酵素使用の野菜作りに精を出しております。野菜、米作りも奥が深く、日々悩みながらの栽培です。屋久島に登りたいのですが、どうなりますやら。子供の教育費に手を焼きながら、何とか田舎暮らしを楽しみ毎日です。

大石 真也（工58）昨年3月、10年ぶりに八ヶ岳に登りました。今年もどこかへと探しています。

野口 明（基58）今夏（昨年）はユーコン川の川下りに行ってきました。毎年、何かイベントを心がけたいと思う今日この頃です。

奥山 宏臣（医59）大阪府立母子医療センターにて小児外科医をしています。ポリクリもしていますので、医学部の学生さん、ぜひ一度、来て下さい。

今村 義弘（工59）横浜で妻子3人と元気に暮らしております。山へは全く行かなくなりましてしたが、お腹が随分出てきたので、何か運動をしなければと思っています。

畑 秀信（人59）この夏（昨年）は暑さを避けて上越・東北方面の沢登りを楽しもうと思っています。先日にも上越の砥沢という沢に行ってきましたが、自然を満喫できる良い所

でした。

大倉 徹雄（工日2）昨年1月に長男が誕生し、「牙登」と命名しました。親の思い通り、山に興味を持ってほしいものです。

前田 智（文日7）太って体力はなく、山には登れず、さびしい限りです。

追悼

牧野 大輔氏（本会理事・東京支部長）2003年6月5日、心不全のため死去、61歳。1965年理学部卒。現役時代は64年度のチーフリーダーとして積雪期の双六・黒部川上流一針ノ木岳往復などを成功に導いたほか、69年秋の本会第3次P29峰遠征隊にも参加された。卒業後は日立化成に入り、副社長などを歴任後、今年4月から取締役。



編集後記

今号は少しさびしい内容になってしまいました。編集者が「50年誌」に氣を取られていたうえ、目ぼしいテーマもなかったためです。会員諸氏からの提案、随想、山行報告などをお待ちしています。（会報担当・高田邦雄）